<table>
<tr><td>授業科目名</td><td>コミュニケーション演習１</td><td rowspan="5">担当教員</td><td rowspan="5">平田　オリザ
杉山　至
石井　路子
平田　知之
山内　健司</td></tr>
<tr><td>必修の区分</td><td>必修</td></tr>
<tr><td>単位数</td><td>１単位</td></tr>
<tr><td>授業の方法</td><td>演習</td></tr>
<tr><td>開講年次</td><td>１年 第１クォーター</td></tr>
<tr><td>講義内容</td><td colspan="3">本講座は、メタワークショップと呼ばれる手法を用いて、実際に身体を動かす演劇のワークショップと、パフォーミングアーツの基礎的な理論に関する講義を交互に行い、大学での学び、特に本学での学びに必要とされるコミュニケーション能力を、実践を通じて身につけてもらうことを主眼としている。
また、この講座は、本学の学びの根幹をなすことから、受講した全学生が、観光、マネジメント、アートマネジメント、演劇・ダンスの全方向に広い関心と好奇心を持つことを目標とし、各分野が横断的に関連していることを体得させることを目的としている。
講義は、複数教員のオムニバスとし、授業によっては複数の教員で運営される。</td></tr>
<tr><td>到達目標</td><td colspan="3">・演劇を通じて、言語コミュニケーションと身体コミュニケーションの双方について基礎的な能力を身につける。
・パフォーミングアーツ、観光、マネジメント、アートマネジメントの連関について強い好奇心を持つようになる。
・グループワークの基礎を体得し、四年間のアクティブラーニングについて積極的な態度や役割分担を身につける。
・社会における芸術の役割を理解する。</td></tr>
<tr><td>授業計画</td><td colspan="3">平田オリザ
第１回　コミュニケーションゲームを通じて本授業の意義並びに、本学での学びの意義やリベラルアーツとしての演劇教育のあり方について理解する。
第２回　引き続き、様々なコミュニケーションゲームを使って、コミュニケーションの本質、特にイメージの共有について必要な事柄を理解する。
第３回　二人一組のテキストを使って，意識を分散するという演技法を学び、そのことが日常生活や教育においてどんな価値を持つかを考察する。
第４回　三人一組のテキストを使って、他者とのコミュニケーションにおいて、どのような課題が起こるのかを社会言語学的な側面から考察する。

石井路子
第 5 回　コミュニケーションの受信器であり発信機でもある身体に着目し、身体感覚を呼び覚ますための基礎的な運動を体験する。1 年間授業を共にする者同士が知り合うためのワークを行う。</td></tr>
</table>

	第 6 回　コミュニケーションの受信器であり発信機でもある身体に着目し、身体感覚を呼び覚ますための基礎的な運動を行う。ニュートラルに立つということを体験する。 第 7 回　コミュニケーションの受信器であり発信機でもある身体に着目し、身体感覚を呼び覚ますための基礎的な運動を行う。ニュートラルな歩行を体験する。 第 8 回　コミュニケーションの受信器であり発信機でもある身体に着目し、身体感覚を呼び覚ますための基礎的な運動を行う。身体の仕組みについてレクチャーを受ける。 杉山至 第 9 回　言葉や身体だけではない、物や空間を使ったコミュニケーションとデザインについてのイントロダクションワークショップ。 キーワードは知覚(五感)、コミュニケーション・デザイン、セノグラフィー 山内健司 第 10 回　しゃべり言葉を調べる（1）　他者の言葉を体験する。 第 11 回　しゃべり言葉を調べる（2）　インタビューを実施、自身と他者の言葉を調べる。 平田知之 第 12 回　演劇を活用したコミュニケーション教育を体験する
事前･事後学習	各回、個人、グループ対象の課題が出されるので、次回の講義までに準備をしてくること。 グループワークが多く取り入れられるので、事前事後に時間を調整し課題に取り組むこと。 第 1 クォーターに学習した内容を、次のクォーターで実践すること
テキスト	授業ごとに配布する
参考文献	『わかりあえないことから』平田オリザ（講談社現代新書 2013 年）
成績評価の 基 準	授業への貢献度・発言　30%　課題への取り組み　30%　レポート　40%
履修上の注意 履修要件	演劇の経験はまったく必要ない 動きやすい格好で参加すること 身体的な障害がある場合は配慮するので事前に連絡をすること

実践的教育	該当しない
備考欄	